

疲れ果てる——に陥ってしまうことがあるかもしれない。それでもこれは、親にとつて、自分は特別なニーズを持つわが子のために何かをしているという、ある種の満足感を与えるものかもしれない。正解のないこと——人が生きていくということにはそもそも正解などないものだが——と向き合い続けるということ、は、案外、しんどい”ことである。そこに具体的な処方箋や訓練方法が提供されると、やはり疲れた親が（教師や臨床心理士といった専門家も）そこに飛びつきたくなくなるのは無理もないことであろう。しかしここには、〇〇というニーズを持っているから、〇〇という診断を受けたからと、その子どもの言動を障害と安易に関連づけて考えてしまう心の状態があるかもしれない。診断名や障害によつて、ユニークな個性を持つ子どもが、いなくなる”わけではない。たとえその子どものどこかに特別なニーズを必要とする発達の特徴があったとしても、それは「その子ども全体が障がいされているということの意味」（七〇頁）しない。本書の随所で述べられているように、

たとえ特別なニーズを持つていようとも、特別なニーズを持たない子どもと同様の発達過程をたどるといって一面を子どもがそれぞれに有していることを忘れてはならないだろう。ひろん、それぞれの子どもの持つニーズについての知識を持つことは大切なことであり、そこに注意は払いながらも、やはり一人ひとりの子どもが持つユニークな人生のプロセス——正解のないプロセス——に伴奏していくのは、親であり、本書の後半で検討されているきょうだいなどの家族、そしてその子どもとかかわる教師や臨床心理士であろう。そしてこの点も、特別なニーズを持たない子どもの発達過程と同様なのである。

本書は、親に向けて書かれているが、ともすればわかりやすい答えに飛びつきたくなりがちな教師や臨床心理士などの専門家にとつても一読の価値があるだろう。子どもが特別なニーズを持つていようといなからうと、一人の人間について「主観的かつ情緒的に理解すること」（一三頁）を通してしか、人間の心の成長はあり得ない。そもそも「この子どもは特別なニーズを持つから〇〇なんだ」では、本当にその子どもを理解したことはないのだから。本書を翻訳されたNPO法人子ども心理療法支援会は、まさに、日々こうした視点を大切にしながら、発達相談サービスなどの事業を展開しておられる。これほど本書の翻訳者

鯨岡 峻著

## 『なぜエピソード記述なのか』

——「接面」の心理学のために

として最適の機関は、現在の日本では他にはないといえるだろう。最後に監訳者である法人代表の平井正三氏および会員の武藤誠氏の労に敬意を表する。 鶴岡奈津子（うかい・なつこ／大阪経済大学人間科学部）

今日、人が人に関わる中で営まれる実践は「人間科学」と称される学問として大学では独立した領域を形成している。具体的には、保育、教育、福祉、介護、心理、保健、看護、医療などの広範な領域を含み、今や資格制度も絡み実学として人気を博している数少ない領域である。

しかし、この人間科学とされる領域は、わが国では大学の組織統合と再編の嵐の中で、いわば泥縄式に設立された部門である。そのため、設立当初はなにかと話題をさらっていたが、今では人間科学とは何かと問われてもその目指すものを明確に示せないというのが実情ではなからうか。それはなぜかといえば、人間科学が本来人と人に関わる営みを対象とする学問であるにもかかわらず、旧来の「自然科学」の学問大系に倣う形で人間科学の研究が遂行されてきたことによるところが大きい。

近代科学の進歩と発展を担ってきた自然科学を強固に支えてきたのが、「客観性」、「普遍性」、「論理性」という三本の柱である。仮説を立て、概念操作により対象を厳密に規定し、条件を設定した実験を通し

て、仮説を検証する。そのような手続きを積み重ねることによって、誰が行っても条件さえ同じくすれば、同一の結果という「客観的」な真理が得られるとされてきた。自然科学はそのような思考原理のもとに圧倒的な成果をもたらしてきたことは事実である。極めて説得力を持つものとして万民が認めているところである。

しかし、人間科学は、自然科学が自然を対象とした学問であるのとは対照的に、人間を対象とする学問である。しかし、人間科学も自然科学に倣って「客観的」な真理を追究することをよしとしてきた。その結果、人間科学が本来追求すべき生活世界における生き生きとした人間の生の営みの現実(アクチュアリティ)から遠ざかり、「心なき」人間科学研究が学界を占有するとともに、現場にもその流れが広く浸透していった。それが「さまざまなプログラムに従った行動変容、ソーシャル・スキル・トレーニング」による望ましい行動の定着」などの行動に焦点化した保育や療育の実践である。そこに一貫して流れているのが、子どもに見られる負の行動を正の行動に外から変えよ

うとする、あるいはできないことをできるようにする、という子どもに「させる」働きかけである。

著者はこのような現実には強い危機感を抱き続けながら、大学人として当初から新たな心理学を目指してきた。具体的には、自ら保育現場に出かけるというフィールドワークを通して、生活世界での生き生きとした子どもと養育者あるいは保育者との関わりを関与観察する中で、そこにあるような生が営まれているかを克明に描きながら独自の発達心理学を構築し続け、今日に到っている。それは一言で言えば、従来の「個体能力発達」中心の発達心理学ではなく、「心の育ち」に焦点を当てた発達心理学である。

著者は強靱な忍耐力と精神力をもつて、毎年書き下ろしの著書によって自らの研究の深化を世に問い続けているが、とりわけ本書で著者は、従来の人間科学研究に対して厳しい批判を行いつつ、著者の学問的立ち位置を鮮明にし、読者(研究者)にも自らの立ち位置はどこかを問う。その意味で本書は数多い著書の中で

も著者の決意のほどが何われ、襟を正して読まずにはいられない迫力を持つものとなっている。

これまで人間科学は子どもの生き様を真正面から捉えてきたかと著者は問う。それがなぜ回避されてきたのか。それは学問の動向と深く関係していると言えよう。先に述べた「客観性」を担保するため、人間科学が自然科学と同じ研究方法を志向したことに尽きる。これまで多くの研究者が取り入れてきた行動科学的研究である。行動科学は、「心(情動)の動き」は主観的なものであるから、科学の対象とはならないとして捨象し、客観的な「行動」に特化することでもって初めて科学的研究が可能であるとする。それゆえ、従来の人間科学が人間を対象としながらも人間の「心(の動き)」そのものから遠ざかっていったのは必然である。

著者は主なフィールドワークである保育現場に足繁く通いながらそこに蔓延する「させる」保育に強い危機感を持ち、「関与観察」にもとづくエピソード記述」という独自の方法論を生み出した。



東京大学出版会 2013年  
3990円(税込)

「エピソード記述」は、保育者が日々子どもと関わり合う中で心が動かされた一瞬の出来事を「エピソード」として記録し、それが生まれた「背景」とその意味について「考察」を加えた三点セットからなるもので、それを保育者同士で読み合うことから、保育を捉え直し、保育の本質を探ろうとする。

本書のタイトルでもある「なぜエピソード記述なのか」といえば、保育に限らず、人と人の触れ合いの場で、当事者(自分と他者)の心の動きを感じ取ることができるのは、われわれ自身が他者の気持ちに関心をもち、積極的な関与を持つことが前提条件だが、それとともにその場で起こった心の動きが感じられる出来事は、当事者にしか確かなものとして捉えられない性質を持つ。したがって、それを他者と分かち合うためには、どうしてもその体験をエピソード

ードとして描き出すことが求められる。「心の動き」に焦点を当てた人間の成長過程の営みを大切にしようとするれば、必然的に「関与観察にもとづくエピソード記述」という質的研究法に行きつくというわけである。

たしかに、昨今従来の量的研究に飽き足らず質的研究を志向する研究者が増えているが、そのような動向に向ける著者の眼差しは厳しい。例えば質的研究として重宝がられているインタビュー研究とそこで用いられるGTA(グラウンデッド・セオリー・アプローチ)などの研究方法では、他者の語りがプロトコルに還元された後に様々な分析の手が加えられ、解釈がなされる。なぜ語りの内容のみがデータ化されるのか。インタビューの醍醐味であるインタビューとインタビュー相互の微妙な気持ちのやりとりがそこでは一切捨象されている。これで量的研究を凌駕する質的研究たりうるのかと疑問を投げかける。

本書を含む著者の三部作の第一作「エピソード記述入門」(東京大学出

版会、二〇〇五)を出版以来、エピソード記述の方法が保育や教育の実践に携わる人に幅広く浸透するとともに、研究者の中にもこの方法論を取り入れる者が現われてきた。彼らの存在が現場や学界において影響力を持つにつれ、次第に行動科学的立場の者たちからの批判も多くなってきた。そのような背景があつて本書は生まれたのではないか。なぜなら「エピソード記述」は質的研究の中の一つの手段として提起されたようなものではなく、行動科学に根ざした人間科学のあり方そのものに対する挑戦であつたからである。

本書の圧巻は第二章(意識体験からメタ意味へ)と第三章(私の考える認識の枠組みと行動科学の認識の枠組みとの相違)である。

その中で著者は自然科学と人間科学の思考の原理をすくなく見詰め直し、両者の相違を、多くの具体例を交えながら丁寧に解説していく。そこで著者が扱ひ所としているのが意識のあり方から出発する現象学の哲学的思考である。

さらに注目すべきは、昨今客観主義の伝家の宝刀のごとく扱われている「エヴィデンス」と、人間科学における「エヴィデンス」との相違について緻密に検証し論じていることである。行動科学(客観科学)で

「明証的(エヴィデント)である」とは、データの客観性と一義性(厳密な手続きを踏めば、誰が観察しても同じ結果が得られること)と、データから導かれる結論の一義性(誰がやっても同じ結論が導かれる)にあるが、人間科学におけるそれは、まずは観察者自身の内部で強く実感されるものとして「明証的である」こと、さらに、観察されたことのメタ意味(生活世界で生きる上でのエピソードの持つ意味)が観察者自身にとつて紛れもない、不可疑の、手応えをもつた真実、つまりは「明証的・真実」として実感されたものであること、さらには、そのメタ意味が他者にも了解可能だと確信される時点での明証性という性質を持つという。つまり、人間科学における「明証性(エヴィデンス)」とは、人間

各々が自己の内部で実感を持つて納得し、深く理解していくという手続

きを踏むことに重要な意味があるのだと著者は説く。

さらに著者は読者(研究者)に「客観科学の認識は、その普遍性や一般性と引き換えに、抽象的で実感を伴わない、ある意味で無味乾燥な認識であることがほとんどである。……学問と生活とが接している人間科学は、そのような抽象的な認識で十分なのか」(一八二頁)と問いか

け、「客観主義の枠組みに立つ限り、人と人の「接面」で起こっていることを捉えることはできない」(一八三頁)と喝破する。

本書のサブタイトルにも示されている「接面」とは聞き慣れない用語であるが、人が人と関わり合う際に生まれる繊細な心の動きの舞台をいう。「あとがき」によれば、これまで著者が好んで用いてきた「あいだ」はあまりにも使い古され、それが重要なキーワードであることが伝わりにくいことから、「あいだ」を「接面」という言葉に置き換えたという。

評者のような「面接」という枠組みの中で治療を営む者(精神科医やカウンセラー)は、「接面」の重要

性を最も実感を持つて置れる立場にある(はずである)。しかし、恐ろしいことに、精神医学や臨床心理学の世界にも行動科学的流れは深く浸透している。著者が問いかける本書のテーマは、われわれ臨床家が避けて通ることのできない内容を持つ。

本来は「心のありよう」を探索する学問であったはずの精神医学や臨床心理学を含む人間科学が「接面」に真正面から向き合わずして成り立ちうるのか。従来の行動科学(客観主義)に依拠する限りそれは不可能であるとし、われわれはその岐路に立っているのだと鋭く問ひ掛ける。なぜなら著者のいう「エピソード記述」の方法は、行動科学の客観主義とは異なった新たなパラダイムとしての提唱であるとの著者の熱き思いがあるからである。

著者の問ひ掛けを読んで評者は思ひ起こしたことがある。それは二年前に見童精神科医小倉清氏と村田豊久氏との対談を企画した時のことである(「子ども」の「こころを見つめて」遠見書房、二〇一一)。

操作的診断に依拠した精神医療において「こころを見つめる」ことが

ないがしろにされている昨今の動向を議論する中で、小倉氏は、「精神科医は恐れられているんだよ。自分の中の放射能が漏れ出してくるのが怖いんじゃないの?」(一〇八頁)と、患者の苦悩にしっかりと向き合うことをしない精神科医の現状を嘆く。

行動科学に依拠する流れが人間科学においていまだに強い力を持つのは、科学の思考そのものにのみある

鈴木涼美著

## 『AV女優』の社会学

—なぜ彼女たちは黙言し自らを曝すのか—

のではなく、その背後に研究者(臨床家)自身の内面の問題が潜んでいるからではないのか。その意味でも「接面」での営みを生業とする者たちは著者の問ひ掛けから避けて通ることができないのではないか。本書はそれほどまでに重い内容を持つものである。

小林陸児  
こばやし・りゅうじ／西南学院大学人間科学部社会福祉学科

め」?な仕事では低賃金なのに、遣り桁のお金を稼げ、母親の側は、お金の浪費をする楽しさを自慢げに語るなど、どうも稼げる自分に対して自己価値が上がった気配すらある。こちららも、この母親を非難する気にはとてもなれない。

こんな問題への答えにならないかと説き出したのが本書である。著者鈴木は性の商品化のある意味では究極の対象であるAV女優との付き合いやインタビューを通して、いささか複雑すぎる議論を展開している。鈴木は、バブル華やかなりどころ、自分自身を含めた都会の女子高生が下着を売るとい性の商品化を日常的に行っていたという事実からスタートする。鈴木は、性の商品化とは何か、という幻想の領域にまたがる大問題である。性の商品化が特に他者に強要をされているわけではない状況下では、これを越えたいという様々なレベルの線が引ける。しかしそのターミナルにあるのがAV女優である。不特定多数の人間に顔と体をさらしての稼ぎなのだから。AV産業およびAV女優を通して、性の商品化という問題を内側

このところ、いたく頭を悩ませていることがある。それは、母親が性産業で収入を得ている子ども(女児)にどうやって性化行動を止め、性教育を行つたらよいのかという問題である。そもそもこの彼女が、性化行動を繰り返すことになったのは、母親の彼から受けた性被害である。性虐待は他の虐待に比べ、まさに侵襲性が著しく高く、解離のレベルも高く、難治性であることは周知の通り

である。こういった場合によくあるように、母親は子どもの性化行動を認めていないし「汚らわしい」とまで言つて激しく非難するのであるが、困つたことに、どうやら子ども入院をきっかけに(時間的余裕ができたのと、いろいろ予定外のお金が必要になって)母親が一線を越えてしまったと考えられる節があり、自分自身は性産業にどっぷり浸かっ

ていてやめる気配がない。「まじ